22号(1982.7)

巻頭言

今年の一月、神奈川県湯河原町で開催された日本石仏協会第五回総会で報告されたところによると、昭和五十六年十二月末現在の会員数は、前年より五七名減って六四八名であった。そして、六五〇名から七〇〇名前後が会員数として安定した状態とみているが、これは昭和五十二年一月にこの会が発足して以来五年間の推移から判断したものである。

それに、会員以外にも書店による本誌の定期購読者が約二〇〇名あり、これを併せて九〇〇名が本誌購読の基準ラインであるという。この約二〇〇名の定期購読者の実態はよくわからないけれども、おそらくこの人たちも会員と同様に、石仏に興味と関心をお持ちの石仏愛好者であるに違いない。そうだとすると会員と定期購読者の合計約九〇〇人は、昭和五十六年末現在における全国の石仏愛好者の実質的な数ということになろう。

実質的なとしたのは、この九〇〇名内外は全国の石仏愛好者の大部分を網羅したものであろう、という前提に立ってのことである。しかし、石仏愛好者ならもっと多いはずだ、石仏協会の会員と本誌の定期購読者だけが石仏愛好者ではない、という意見もあるかもしれない。つまり、石仏愛好者というのは、読んで字の如く、石仏を愛好する人から、積極的に石仏と取り組んで調査や研究をしている人まであるからである。

ところで、石仏愛好者という言葉が一般的に用いられるようになったのは、ひところの石仏ブーム以来のことである。事実

石仏ブームが全国に石仏を愛好する人びとを多数生んだからであった。それまでは石仏に無関心だった人がこれを契機に目を向けるようになり、各地の石仏を訪ねるようになったのである。

しかし、ブームなどというものは、一時的な流行のようなものであって、やがては鎮静化への一途をたどるものである。それですべてが終わってしまうものもあるが、石仏だけは庶民信仰という、われわれにとって身近な宗教行為の所産であるだけに、心に触れるものを備えており、それに加えて数が極めて多いうえに多彩であることなどから、ますます興味と関心を深めていくようになるのである。これが趣味として定着した人びとが、石仏愛好家のほとんどではないだろうか。

従って、一つでも多くの石仏に接しようとして、各地を訪ね歩くことになるわけだが、見て楽しむだけの人から、多くを見ているうちに対象とする地域を限定するとか、道祖神、庚申塔、板碑などと対象を定めて調査を深めていこうとする人びと、さらに調査の結果から生じた種々の疑問の解明に取り組む人など、同じ石仏愛好家といっても石仏に対する態度や方法はさまざまである。

しかし、一時的に石仏への関心を深めたが、その後他に興味が移り、脱落する人が出るのもやむをえないことである。こうした人の増減は今後も見られるであろうが、ここで私などが期待するのは、若い会員の中に極めて熱心に調査研究に励む人が目立ちはじめたことである。これらの人びとの精進と成果がこれからの石仏研究を推進する原動力となることは申すまでもないが、さらに新たな発想への可能性を秘めた若い愛好者を生むことにもなる。そしてこれらの人達は、単なる石仏愛好者から石仏研究者への成長が期待されるわけである。発足以来五年間の歩みを踏まえて、これからの五年間、あるいは十年間と将来への石仏研究と会の発展を図るために、役員に若い人を起用した大護会長の意図もこの辺にあると思うが、そのためにも今後の活躍に期待し、われわれも及ばずながら応援したいと思う。

（胡桃沢記）

23号（1982.12）

巻頭言

昔見たことのある石神・石仏を何かの機会に再び訪ねて、昔あった場所に、昔のように立っているのを見ると、旧友にでも再会したような気分になる。ことに私などのように信州の松本で生まれ、道祖神のある風景の中で育った者にとっては、少年時代に見慣れていた道祖神には種々の思い出があり、それらを見ると当時のことが、たちまち脳裡によみがえってくるのである。それが見られないと、もしや誰かに運び去られたのではないかと、寂しい気持になったり、盗まれないようにというので周囲に柵をめぐらされていると、何ともお気の毒にと思わざるを得ない。

近年は、道祖神・庚申塔などの碑石は、石造文化財と称して郷土を研究する資料として重要視され、一方では観光資源にもなるというので、調査保存の対象となった。このため住民の看視の目も行き届くようになったので、一夜のうちに石像が自家用車のトランクに収められて、運び去られるということは少なくなったようである。住民のささやかな願い事を届けてくれる神仏として造立され、一方では石神・石仏のある風景を作り出していた石像が、ほんの一部の不心得者の仕業で姿を消してしまうことは、まことに遺憾なことである。

昔は、松本平の村落では、道祖神の石像を盗む習俗があり、これを「道祖神の嫁入り」などとも呼んでいた。これは、村落に石像を造立するだけの経済的な余裕がなかったこともあったであろうが、むしろそれだけではなく、よその村の道祖神を盗

んでくれば、霊験がいっそうあらたかになるとも考えられていたのである。そこで、隣村などから石像を夜陰にまぎれて運んでくれば、翌朝必ず酒肴を携えて隣村を訪れ、あなたの村の道祖神様をわれわれの村に輿入れさせてもらいましたと挨拶したものであった。ここが現代の不心得者とは根本的に違うところである。

松本平の各地には、近世末までこうした習俗が行われていたことが語り継がれているし、これを物語る石像も見ることができる。そして、盗まれた村では再び盗まれないようにするために、「帯代十五両」つまり結納金十五両などと刻んだ、いわゆる「正札のついた道祖神」とか、容易に運び出せないように、以前よりは大型の石碑を造立するようになった。これを「道祖神の嫁入り」と称して挨拶をしたり、結納金を納め、自分の村のサエノカミとして祀るのはよいほうで、挨拶もなく運び去る現代の道祖神盗みは極めて悪質というほかなく、盗まれた村にとっては、先祖伝来の文化財を失うことになるのである。

さらに、われわれにとって迷惑なことは、村民の監視がもっと行き届く場所に移されてしまうことである。そうでなくてさえ、近頃は道路の拡張工事などを理由にとんでもない所に移してしまうことで、われわれの懐かしい思い出のひとつが消えてしまうことはともかくとして、サエノカミとして道祖神像が造立されていた場所の意味までも失われてしまうのである。

その点を考慮してか、それとも、野におけ野の仏ではないけれども、昔からあった場所に置いておこうと努力している向きもみられる。しかし、これも盗難予防を講じなければならず、基礎をコンクリートで固めるのはまだしも、周囲に柵をめぐらしてしまうことは、かえって石像を狭い所に押し込めてしまうことになり、われわれにとっては写真撮影はおろか、背面などある紀年銘などを読もうとするときには妨げになる。とは言え、われわれ調査する側も、村人たちが祖先から受け継いできた石神・石仏に接する際には、それなりのエチケットも守らなければならない。われわれの仲間には石像を独り占めにする不心得者はいるはずはないが、拓本の墨で碑石を汚したり、不遜な態度で接しさえしなければ、村人たちも安心して碑石を狭い柵の中や小屋に押し込めてしまうようなことはしないであろう。

（胡桃沢友男）

24号(1983.2)

巻頭言

第二十三号に続いて第二十四号も発行が遅れたことを、まず最初に会員の皆さんにお詫びしたいと思う。

本誌の発行は当協会最大の事業であるので、常に充実した内容のものが、三月、六月、九月、十二月の年四回、定期的に刊行されなければならないことは申すまでもない。それがこのように遅刊が続くと、会員の寄稿も減少してしまったのである。本誌の遅刊が会員の皆さんの士気を妨げ、調査研究活動や執筆にも少なからず影響を及ぼしたことが考えられる。

すでに会員の皆さんにはお知らせしたように、協会発足以来六年間、協会の事務所を置くとともに本誌発行所として多大の御協力をいただいた木耳社が、会社の事情によりこの号を最後に本誌の発行を辞退されることになった。ここに、田中社長以下木耳社の皆さんに感謝の意を表する次第である。

幸に次の第二十五号からは国書刊行会を新たな発行所にして、本誌の刊行が継続されることになった。今後は会員の皆さんのこれまで以上の御支援と御協力を得て、もちろん遅刊をなくすとともに、さらに内容の充実に努めたいと考えている。

今回の遅刊は、発行所が変わることになったことが直接の原因ではないが、このことを含めて昭和五十七年という年は、日本石仏協会にとって、発足以来六年目にして迎えたひとつの転機であった。

一時は継続を危ぶまれた石仏講座は、若さを結集した創意と行動力によって見事成功し、五十八年度への希望をつなぐことができたのは、何よりも大きな収穫であった。

もうひとつの協会の事業である石仏旅行は、第二回海外石仏旅行として「インドネシア石造美術の旅」を実施することができたが、国内の旅行では諸般の事情で中止せざるを得なかったものもあった。これについては反省と検討が行われ、これも五十八年度からは若いパワーを導入して、新たな構想のもとに計画し、実行することになった。

それに、本誌の発行も木耳社の辞意という事態も生じて一時はどうなることかと思われるほどであった。国書刊行会の積極的な好意によって、この問題が解決したのは昭和五十七年も終わりに近いころのことである。

こうした、協会にとっては試練ともいうべき事態をくぐり抜けるメドはどうやらついたが、これを転機として、われわれは協会の事業を活気あるものにし、協会の発展をはからなければならない。これには執行部の努力はもちろんのことであるが、会員の皆さんの御理解と御尽力を期待したいと思う。

具体的な問題については本誌を通じてお知らせすることになるが、ここで特にお願いしたいのは、会員の増加である。協会の基礎は会員であることは申すまでもない。PR不足も事実だが、何よりも会員の皆さんのロコミによる勧誘が大切である。

そのためにも本誌を魅力あるものにし、事業を活発化しなければならない。特に本誌を魅力あるものにするためには、会員の皆さんの積極的な寄稿に期待するところが大きい。ひところ難解なものが多いという声もあったが、必ずしもそうしたもののみに偏っているつもりはない。本誌の性格から現代の石仏研究をリードする論考がなければならないし、全国各地の皆さんから寄せられる報告も是非必要である。さらに石仏の見方・考え方についての解説も必要であろう。といって筆者が少数の人に偏るのは好ましくない。その意味でも多くの皆さんの寄稿をお願いしたい。そして新風を吹き込んでほしいのである。

発行所が変わることによって、本誌の編集方針や体裁が格別変わるものではないが、これを機会に気分を一新して、編集に取り組み、協会の基礎を確固たるものにし、石仏の調査研究の進展に寄与したいと願っている。

（胡桃沢友男）

25号(1983.3)

巻頭言

日本石仏協会は、昨年十二月をもって満六年を経過し、機関誌『日本の石仏』も、二四号まで出すことができました。これはひとえに会員並びに購読者の方々のご協力と、発会以来絶大なご支援ご協力をいただきました出版社木耳社のお陰によるものであり、ここに深く感謝の意をささげます。

このたび木耳社におかれましては、社の方針によって『日本の石仏』の刊行から手をひかれることになり、それに代って国書刊行会が、『日本の石仏』の編集・発行をおひきうけくださるとともに、会務のお手伝いをもご快諾くださることになりました。

国書刊行会におかれましては、今までも石仏関係の図書の出版をされておりましたが、本年度の、A4判の全国的な『日本の石仏』シリーズ一〇巻（定価各巻五〇〇〇円）を手はじめに、年を追って石仏関係図書の刊行に、より積極的にとり組まれることになりましたので、石仏に関心をもたれる方々にとっては、極めて大きな期待が寄せられるところであります。これを機に、日本石仏協会としては、会員の総力を結集しての『石仏図典』（仮称）や、新たなる『石仏シリーズ』等を企画し、国書刊行会の石仏図書出版に同調したく考えておりますので、会員各位の一層のご奮起をお願いいたしたく存じます。詳細は理事会において、十分検討するつもりでおりますので、会員各位からも、いろいろとご意見をお寄せくださるようにお願いいたします。機関誌『日本の石仏』も、これを機会に、より皆様のご要望に沿えるものにするつもりでおりますので、これまた隔意

のないご意見をお願いいたします。

七百有余名の全国にわたる、しかも多彩な会員を擁した日本石仏協会は、その運営には多くのむずかしい問題をかかえておりますが、会員各位が、自分たちの会であり、進んで協力することを惜しまぬ覚悟をもっていただかないかぎり、よりよい発展は望めません。機関誌も、今までのところ概ね各号を充足できるだけの原稿をいただいておりますが、編集にはより多くの、しかもバラエティに富んだ原稿が望まれます。それとともに、会員数の一層の増加によって少なくとも一千名をこえることが、よりよい機関誌をつくりうる基になりますので、お互い会員獲得のために十分の努力をはらわなければならないと存じます。

どの学界の機関誌でも同様ですが、志を同じくする会員の集まりであっても、各々の志向するところは必ずしも一様ではありません。一冊の機関誌の論文も、そのすべてが口にあうことは期待する方が無理で、その中の半数が参考になる程度で満足すべきものと考えます。目を通さなかった論文も、収蔵しておくうちに、やがて必要になってくることは、誰しも経験するところです。毎年四冊のうち、六月と十二月のものは特集ということになっていますが、本年度は六月末に出る26号は「道祖神特集」で、松村雄介氏が、十二月末の28号は、「中世の石仏特集」で、織戸市郎氏が、それぞれ責任編集者になっています。特集原稿が満杯のときは、特集関係以外の原稿は、27・29号に譲ることになりますが、それにこだわらずに、少しでも早目に原稿をお送りいただきたく存じます。なお「会員の広場」並びに「本の紹介」欄の投稿が、より多くなることを期待しております。特集原稿は責任編集者宛に、その他の原稿はすべて大護八郎宛にお送りいただきたく、国書刊行会への直接の送稿はなさらぬようにお願いいたします。

この新しい発足を機に、より皆さまに直接した内容のものにするために、お互い心を新たにして奮起したく思いますとともに、国書刊行会のご協力・ご援助をお願いいたします。（大護記）

昭和五十八年三月

26号(1983.6)

巻頭言

最近では「石仏巡り」のような催しが行われると主催者がだれであれ、驚くほどの人々が集まって下さる。石仏が一部エリートのものであった時代は、終ったといえよう。石仏の所在を広く知らしめる石仏巡りの手引書のような存在がエリートから非難されたのは、もはや遠い過去の出来ごととなった。今後より多くの人々が、その存在を認識し、より多くの人々の眼が守ってくれるならば、石仏の破壊や盗難は、さらに減少するにちがいない。

しかし石仏の保守・保全のためには、協会としても、もっと積極的に行動する必要があるように思える。日本石仏協会は、会員それぞれの立場や見解の差異を尊重しつつ、その中で相互の連帯を求めているのであるから、人さまざまな石仏とのかかわりについては、すべてに寛容でなくてはならないが、石仏を損耗させたり、破壊させるおそれのある現象や行為に対しては、寛容である必要はないし、これを見過したり、あるがままの石仏の姿を尊重すると称して傍観している人々が、もしプロであるならば、厳しい指弾の対象とすべきであろう。石仏によって多少なりとも物質的恩恵を被っている人々をプロとするならば、その恩恵を、芸術的創造や研究の成果を通じて社会に還元するだけでなく、より具体的な行為によって、石仏の保護のために、自身の社会的影響力を行使して欲しいと願うものである。

もちろんこの課題は、プロへの要請にとどまらず、石仏から精神的恩恵を得ているすべての愛好者への要請でなくてはならない。個人として、あるいは地域社会の一員として、いますぐ実行できることは、けっしてすくなくない。もし苔が生えている石仏をみかけたら、その苔をむしり取るだけでもよい。苔は石の成分を溶解し、これを栄養として生育しているのであるから、苔の生長は石仏の劣化につながっている。仰向けに倒れた石仏があれば、引き起こして、安定するよう据付けて欲しい。正常に立てるだけで、石仏の風化は大きく阻止される。

ボランティア活動として年一回ぐらい石仏を洗ったり、周囲を清掃したりするグループがあるが、すばらしいことだと思う。筆者の居住する地域社会では、このところ石仏に覆屋を新設したり、ふるい覆屋を更新するちょっとしたブームが起こっている。こうした運動が定着し、拡大されれば、石仏の保護に大きく寄与することは、明らかである。現在は露座であっても、かつては藁祠や木祠に護られていた石仏は多かったのであるから、石仏とは露座するものという観念は、改めなくてはならない。

しかし保守・保全の行為には、個人や地域社会の手には負えないような事業も含まれる。破損したり破損するおそれのある石仏を、修復・復元する技術は一部の研究機関で開発が進められているようであるが、まだ一般に利用できる段階にはないし、費用もかかり過ぎる。現状では、せいぜい無機や有機のセメントでつなぐ程度のことしかできないのであるが、効果的な補修技術の開発や普及、そしてその実施などを、関係方面に働きかけ、推進しようという声が、会員の間に高まってくるならば今後当協会の重要な社会的使命として、積極的にとり組めるにちがいない。石仏の保守、保全について、さらに成熟した議論が行われ、実行に移されることを期待するものである。

（松村雄介）